

「京都学」構築のための教育文化資料研究

川村 覚 昭

要 旨 最近の我が国の学問的傾向は、自然科学の研究手法に強く影響されて、極めて綿密で精密なものになっているが、その反面、細分化された研究の全体を統一する厳密な視点は余り見られないように思われる。本稿では、この後者の視点から「京都学とは何か」という根本問題を考えている。なぜなら、「京都学」は、表面的に見れば、京都という地域の学であるが、京都は、千年以上にわたって日本の首都であり、日本の歴史と文化の中心として発展してきたことを考えると、日本全体と関わっているのであり、その意味で、京都学は、単なる地域学ではなく、「地域—全体学」でなければならないからである。

本稿では、京都学をこうした学問として位置づけることができる背景に京都の教育があることを明らかにした。京都は長い歴史のなかで伝統を培い、重厚で奥深い文化が庶民生活のなかにまで浸透しているが、そのことが、京都人の間に文化継承の意識を育てる基となっている。その意味で、京都では家庭や地域に文化性と教育性が根ざしており、「京都学」構築のためには「教育」を無視してはならないのである。

私は、こうした問題意識から京都に於ける教育の特殊性に注目し、明治初年の教育文化資料を翻刻して「京都学」構築の可能性を考えた。そのさい翻刻した資料は、国史学者の徳重浅吉博士が収集された『徳重文書』に求めた。なぜなら、明治初期のオリジナルな教育文化資料は、今日では、この文書以外には存在しないからである。

（キーワード）自然科学の研究手法、厳密な視点、地域学、庶民生活、京都の教育、文化継承の意識、家庭と地域の文化性と教育性、明治初年の教育文化資料、徳重文書

はじめに

我が国の最近の学問的傾向は、専門領域が極めて細分化され、多様化してきている。このことは学問の高度化と関係しており、自然科学

の綿密な研究成果がそのことを最もよく表している。しかし、研究の精密化（Exakieren）は必ずしも厳密化（Strengnehmen）とは関係しない。自然科学は、確かに細分化された研究領域で精密な研究がなされるが、その細分化された研究領域を統合する視点は未だ持ち合わ

せていないと言うことができるであろう。その意味で、厳密性はないのである。しかし、最近の研究は自然科学の影響が強く、細かい精密な研究が先行しているように思われる。今、本稿で問題にする「京都学」も、一般的にはこうした学界の傾向を受けて主張されてきたのではないかと思われる。このため、学問的手法はどうであれ、京都に関することを細かく調べれば、それで「京都学」になるという観念が出来上がっている。しかし、そこには学問の厳密性はないのであって、果たして京都の「学 (Wissenschaft)」と言えるようなものが成立するのかどうか疑問である。本稿では、こうした視点から「京都学」が成立する基盤が京都の教育といかに関係するかを問題にし、今まで余り注目されてこなかった明治初期の教育文化資料を翻刻して、「京都学」の厳密な構築の可能性を考えたいと思う。

Ⅰ 地域学の根本問題

ここ数年、或る特定の地域を対象にして、それを研究する「地域学」が、我が国の国際化と情報化と結びついて急速に注目されてきている。国際化は異文化との接触を必然的なものにし、異文化と自文化との相違に気づかせる役割を果たすが、最近の地域学の高揚は、国際化の進展によって却って自文化のルーツや歴史に対する関心が日本人一般に高まり、今まで忘れていた国土や郷土の伝統や文化を再発見しようとするのと期を一にしている。このことは、また、急速に発展した情報化とも重なっている。

最近の情報化は、単なるマスメディアの発達だけでなく、パソコン

を中心とした通信情報網の発達によって瞬時に世界の動向を知り、それに参加できる双方向的なネットワークができあがっているため、各個人はパソコンを通して異文化と自文化を共時的に比較できるようになっている。このため双方向的なネットワークに参加することで自らの置かれている社会的文化的状況を改めて認識し、世界へ発信しようとする意欲と関心から国内の様々な文化や歴史が注目されているのである。

さらに最近の地域学高揚の背景には、我が国が高度経済成長の成功によって経済大国になった結果、国民の経済的余裕から空前の旅行ブームが到来し、異文化と自文化を肌で感じる事が可能になったことがある。この場合、異文化とは必ずしも外国文化を指すとは限らない。そこには自分が今まで慣れ親しんで来た地域文化とは違うものを全て異文化として含むことができる。人間は、誰しも一定の世界に自分の意志とは無関係に投げ入れられて育ってくる「世界内存在 (In der Welt-sein)」であり、その世界内に凝集されている様々な内容を吸収して始めて人間的になることを考えると、人間の意識は特定の地域との相関に於てあると言え、従って誰しも地域に根ざした文化性を無意識の内に自己の意識としてしているのである。それ故、別の地域の文化性に触れると、その違いに気づくのであり、その意味で国内に於ても異文化接触が起こりうるのである。旅行は、そのことを可能にする典型的な出来事である。

このように、我が国に於ける今日の地域学の活発な隆盛は、世界的な国際化と情報化、および国内的な旅行ブームが背景をなしているの

であり、様々な地域への接触と好奇心が地域学を喚起していると言えるであろう。それは、「大阪学」「東北学」「東京学」「横浜学」など地域の名称を使うことで具体化している。しかし、地域学は、研究対象を空間的時間的に伸縮させることができるため、その研究領域は極めて豊富である。例えば、東京を考えた場合、空間的には東京23区のそれぞれを対象とする地域学が可能であり、その意味で「新宿学」などが成立するであろうし、さらに空間を限定すると例えば「歌舞伎町学」なども考えられるのである。また、時間的に限定すると、「江戸学」が可能となるのである。

しかし、今、私が示したような地域学はきわめて通俗的な見方であり、その本質を問うたものではない。空間的時間的に広がる地域をただ研究対象にできるという意味で地域学と言ったにすぎない。そこでは、「地域学とは何か」ということは少しも問われていないのである。私は、最近の地域学の隆盛には、上から見ただけの国際化・情報化・旅行ブームを背景に喚起された地域への目覚めと、高度経済成長以後の経済的価値優先の社会状況から何事も経済的指標で計る意識が先行した結果、地域の活性化や地域振興という通俗的な経済意識とが重なって主張されている側面が強いのではないかと思う。しかし、こうした地域学では、学問的背景がきわめて希薄であるため、早晚地盤沈下を起すのではないかと考えられるのである。その意味で、「地域学とは何か」という根本問題を我々は忘れてはならないのである。

II 地域—全体学としての京都学

今、我々は、最近の地域学の問題点を指摘したが、我々が構築しようとする「京都学」はどうであろうか。「京都学」も地域の名称を付けた単なる通俗的な地域学なのであるか。確かにその名称の表面だけを見ると、通俗性を持ちうることは否定できない。しかし、京都という地域は、周知のように平安京以後日本の首都として長い歴史の攻防の中で独特の文化と伝統を育み、日本文化の源泉として他の地域とは本質的に異質しなければならない京都文化を生み出したことである。その意味で、京都は、日本の文化的中心として重厚さと奥深さを持ち、他に類例を見ない複雑な襞を蔵しているのである。従って、京都は、昔から識者の関心と呼ばれ、政治や経済の攻防の地であるとともに、教育や宗教の中心地であった。たとえば、空海が八二八年（天長五年）に洛南の地に構想した綜芸種智院は日本で最初の庶民の普通教育機関であるが、それは宗教と教育が見事に結びついたものである。この綜芸種智院の綜芸とは「兼綜衆芸」という仏書の言葉から取られたもので、諸学兼学を意味し、空海は仏教を中心に「貧賤ノ子弟」に「立身之要、治国之道」を教育しようとしたのである。空海は自らの教育理念を次のように言う。

「綜芸種智院ヲ建テテ、普ク三教ヲ蔵メテ、諸ノ能者ヲ招ク。冀フ所ハ、三曜炳著ニシテ、昏夜ヲ迷衢ニ照シ、五乗鑣ヲ並ヘテ、群庶ヲ覺苑ニ駈ラム。」¹⁾

京都では、このように早い段階から庶民を対象にして教育ができるだ

けの人材と資材があり、文化の重厚性が既に確立されていたと見てよいであろう。それは、空海が綜芸種智院の諸学兼学について「道ハ仏経ヲ伝ル所以ナリ、俗ハ外書ヲ弘ル所以ナリ、真俗離レズトイフハ、我カ師ノ雅言ナリ」と言うことから知られる。空海のいう真俗とは仏教と儒教のことであるが、その兼学が「我師雅言」と言われるように、京都では既に兼学の思想が浸透し、行われていたことを窺わせるのである。このように京都は、千二百年前から諸学のメッカであり、また文化の発信地として独特の文化的風土を育んできたが故に、地域自体が独特の文化性と教育性を内包しており、先に指摘したような通俗的な経済意識から人為的に考えられるような地域学とは違った「地域学」の構築が構想できる基盤を持っているのである。その点で最近、京都の学界で設立された「財団法人大学コンソーシアム京都」は注目すべき組織である。

「大学コンソーシアム京都」は、「大学教育・研究総合センター」を母体として一九九八年五月に発足した大学間共同の組織である。しかし、これは、単なる大学間の共同組織というのではなく、「大学、地域社会及び産業界」との連携を視野に入れて、大学教育の改善および教育研究の向上と「地域社会・産業界」への成果の還元を目指すものである。それ故、大学コンソーシアム京都は、まさに京都という地域社会に開かれた共同教育機関として考えられたものである。京都に於てこうした組織が日本の学界に先駆けて創ることができたのは、既に「大学教育・研究総合センター」の基本理念が言うように、京都の大学が、「伝統的な文化都市の遺産の上に集積しているだけでなく、

京都の都市特性と密接に結びつきながら発展してきた⁽³⁾」からである。既に存在する高度な文化遺産の集積を背景に発達した京都人の生活文化が高度な教育の受容を可能にしたのであり、その逆ではない。それ故、京都ほど大学が地域と密接に結びついているところはないと言えるであろう。京都の人が、大学生のことを「学生はん」と言い、大事にしてきたことは、私など先祖代々京都に住んできたものにとつては周知の事実である。こうした大学と地域との密接な関係から、大学コンソーシアム京都は二〇〇一年六月に「学術コンソーシアム」を設立し、「世界に発信できる「知」の統合」と「京都ブランドの創造」を目指すことになるが、その目的を実現するために具体的に展開された研究活動が「京都学」と「21世紀学」の構築である。⁽⁴⁾なかでも「学術コンソーシアム」の設立に中心的役割を果たした西島安則氏は、「学術コンソーシアム」の中心が「京都学」にあるとして、その目的を次のように語っている。即ち「学術コンソーシアムは大学として横の連携を考えるだけでなく、歴史都市としての京都のいろんな面を引き出して、こんな宝がいっぱいある京都を生かした講義をし、研究をはじめの⁽⁵⁾です。」と。京都は、まさに学問的研究の対象としては宝庫であり、「京都学」構築の可能性は十分にありうるのである。

しかし、問題は、「京都学とは何か」ということである。先に私は、「地域学」の構築のためには「地域学とは何か」という根本問題を問わねばならないことを指摘した。京都学の場合もやはりこの問題が学問として成立するためには問われねばならないであろう。私は、その意味で「京都学」は「京都の本質を問う学問」と考えたいと思う。従

って、そこには当然「非本質」が隠されていると見做さねばならないのであり、「京都学」は、それ故、京都の本質と非本質との関係に焦点を当て、それを析出すること、そして京都の本質を抉出することであるとすることができであろう。その場合、京都は、単に一地方という意味での地域ではないことに注意しなければならない。京都は、千年以上に渡って日本の中心地であり、日本全体と密接に結びついた地域である。それは、今日に於ても変らないのであって、重厚な生きた文化の本拠はどこまでも京都にあり、京都が発信のもととなっているのである。従って、京都学は、単なる地域学ではなく、日本全体を視野に入れて考えなければならぬ地域学なのである。その意味で、京都学は、「地域—全体学 (regional-allgemeine Wissenschaft)」なのである。

III 京都学構築のための教育文化資料

京都が、明治維新の遷都以後、一地方都市に転落せず、今日に於ても日本の文化の中心を維持し、見方によってはアジアの、また世界の文化の一つとして注目される文化都市であることができるのは、京都人の中に自文化に対する誇りとそれを継承しようとする強い意志があるからである。文化は、文化教育哲学者のシュプランガーが指摘するように、世代間を越えて継承されるが、その継承にとって最大の機能を果たすのが教育である。それ故、文化と教育とは密接な関係にあり、教育なくして文化の継承の意志は形成されないと言わなければならないのである。シュプランガーはそのことを次のように言う、「文

化とは超個人的な意味連関であり生命連関であって、その影響のもとで、私たちは日々呼吸し、さまざまに悩み、しかもまた成長するのである。そもそも、文化がくりかえし課題および義務づけとして個々人の心の中にとり容れられ、理解され、持続されまた責任をもって形成しつづけられるのでなければ、その文化は生存しつづけられないであろう、という事実こそは、この文化という包括的な勢力における逆説なのである。」⁽⁶⁾と。京都が日本文化の継承の中心地であるのは、京都人が、シュプランガーの言う文化継承の義務を教育を通して意識しているからである。そのさい特に注意しなければならないのは、そうした教育の場所である。京都の場合、家庭の多くが代々受け継がれた重厚な文化の香りをもっており、一般家庭でも書画骨董などの文化的道具(文化財)や茶道華道などの文化的施設が存在することは不思議ではない。そうしたものを媒介にして文化教育が世代間で行われているのである。その意味で、文化の継承の意識が京都人には強いと言わなければならないが、それと共に重視しなければならないのは、京都が地域と結びついた学校教育を展開してきたことである。

京都が、明治二年に全国に先駆けて小学教育を実現したことは周知の事実であるが、この年の五月に柳池小学校が開設され、これを手始めに、同年のうちに京都では上京と下京にそれぞれ三十二校、合計六十四校の小学校が発足する。小学校の配置は、明治二年一月に実施された町組編成をもとに考えられているが、それは、三條通を境に上京と下京に分け、上京に三十三、下京に三十二の町組組織(それを「番組」と呼ぶ)を造り、それぞれに一小学校を創るというものである。

このため、当時の小学校の校名は固有名詞を使うのではなく、配置された町組の番号を付して呼ばれたことから一般に「番組小学校」と言われている。ちなみに柳池小学校は、開校当時は二十七番組小学校と呼ばれたのである。こうした小学校は、基本的に地域の住民の結束によって建設されたものであり、京都府の呼びかけに下から応えたものである。従って、当時の小学校は地域住民の共有財産であり、京都人の文化意識の高さを示すものであると言うことができるであろう。そこには、遷都後に疲弊した京都を近代的文化都市として復興しようとする強い文化意志があると言わなければならない。また、明治五年の「学制」頒布後、番組小学校は、新校舎に建て替えられていくが、その建築費の大半を町組が負担したと言われている。⁷⁾こうした事実を見る限り、京都人の間には教育に対する強い期待と意欲が漲っていることが分かるのであり、「京都学」を考える場合、教育を京都の本質的問題として捉えねばならないのである。京都学が、もし「教育」を研究のカテゴリーから排除し無視するならば、その研究はおそらく非本質へ滑り落ち、京都の本質を却って覆い隠すことになるのではないかと考えられるのである。その意味で、京都学構築のためには教育の問題は最重要課題なのである。

さて、我々は、今までの考察から、京都学構築に於ける「教育」の位置をほぼ明らかにすることができたであろう。本稿では、こうした視点から今まで殆んど目の目を見えていない明治初期の京都の教育文化に関わる資料を翻刻し、京都学構築の基礎的資料を提供したいと思う。その際、翻刻の対象とするのは、国史学者の徳重浅吉博士が収集

された『徳重文書』である。なぜなら、私の調査した限り、明治初期の教育文化資料は『徳重文書』(『徳重文書』は、徳重浅吉博士が皇紀二千六百周年と京都府教育六十周年の記念事業として「京都府教育」を編集するに当たって収集した教育資料群のいう)以外にはオリジナルが存在しないことが分かったからである。その意味で、『徳重文書』は、京都の教育を知るうえで極めて貴重な資料群とすることができるであろう。

IV 明治初期の京都教育文化資料の翻刻

今回、私は、中等教育のものを中心に異文化理解に関する資料を翻刻したいと思う。明治維新以後、我が国は欧米列強を模範にして近代化を実現しようとするため、多くの欧米人を「お雇い教師」として招聘することになるが、京都に於ても早い段階から欧米人を教師として採用している。その仲介を取ったのが、ドイツ人のカール・レーマン(Carl Lehmann)であり、彼は幕末に來日して長崎に貿易会社「レーマン・ハルトマン商会」を興し、広く活躍するのである。⁸⁾京都が欧米人を教師として招聘できたのは、その背景に重厚な京都文化と経済力があつたからである。高い文化意識をもつが故に、新しい異文化に目を向ける進取の精神が現れるのである。そうした京都人の意欲を知るためにも、異文化理解に関わる外国人教師の資料を翻刻したいと思う。ただ、既に、昭和四十七年七月発行の『京一中洛北高校百年史』にも基本資料が翻刻されている。従って、本稿では、そこにはない文献を翻刻したいと思う。ただ、一部は重複する。なお、翻刻に当たっては適宜句読点や改行を施して読みやすくした。

(1) 中等教育機関としての府学（京都府中学）の創設

①明治三年八月に京都府は留守官への府学開校伺を提出し、本格的な中等教育の計画を立てる。当時、我が国の高等教育機関としては東京に大学校がただ一校あるのみであった。従って、京都では府学が最高学府となり、そこに全ての知性と英知が集ることになる。以下の資料が、その「府学開設伺」である。（徳重文書第二巻 九八八―九八九頁）

別紙之通被仰出候間此旨相達候事

京都府

庚午八月

留守官

留守官

其地学校被 府学取建被仰付候条従来管轄之分京都府御引渡可申候事

但学校御用掛り総テ可差免候事

庚午八月

太政官

（自明治二年七月至明治四年八月中学校記）

②京都府は、府学開設に当り、維新政府の教育方針に対して京都の教育の独自性を強調する。維新政府は、明治二年六月に「大学校開講の達」を出し、国民教育の基本方針を示すが、翌年三月にはそれを修正した『学体』を公布する⁹⁾。京都府は、それに対して独自の立場から批判的に応え、京都の教育を推し進めようとする。それは、府

学の教育理念を示めした「府学開設」の理由書に明確に現れている。そこでは、独自の立場から知識を世界に求めることを示す。その資料が以下のものである。これは、『京一中洛北高校百年史』にも翻刻されている。（同書 九九〇―九九三頁）

今般府学取建被仰出候ニ付、体裁相立候様可取計旨御達シニ付、体裁ノ大略先日不取敢相伺候処、追而学則被仰出候ニ付、先伺之通之旨御附紙之趣奉畏候。然ル処、神典国典皇典ヲ以、基本と為シ、漢籍ヲ以て補翼ト為スコシト之御主意、兼てより被仰出候之処、間ニ者、右基本補翼之儀ニ付、年々種々議論を起し、却テ学問之実用を失ひ候徒有之。抑モ僅ニ有限之事ヲ以て無限之事を為すベキノ今日ニして、前件之如く空論を費し候而は、唯多く彼人の子を毀ふ耳。人材教育たる学校の本意に反し候様存候。依て此度府学に於ては神典皇典を以て基本と為し、漢籍ヲ以て補翼と為すの大主意ハ、固より大に尊奉致し候得とも、是は道の本体なり、其學術に至り候而は、皇漢ハ固より広く海外之事に亘り、折衷実用遂ニ

皇朝之大道ニ帰着するを主として、以て唯生徒の駸々業之進むを急務と為す可き乎。追て学則被 仰出候迄、先即今右辺之処を以て仮ニ学則を立、開校致し度候條、右大主意之処、前以一応御届いたし置候。附而は規則出来之上ハ、追々可相伺候得とも、差当り府学専務之者一員を相置度処、広瀬範治儀則其人ニ可有之と存候間、至急ニ当府典事江御任し被下候得ハ、同人を以て督学と致し、専ら府学之規則相立度、此段至急に相伺候也。

庚午八月廿九日

京都府

弁官御中

追而先達而御懸合之旨ニ随ひ広瀬範治江之御達書返上いたし候猶範治当府典事任官之儀ハ至急ニ御運び被下此段相願候也

(自明治三年七月至明治四年八月中学校記)

③明治三年十一月に「府学」が開校するが、その開業式と洋学重視の学務課の文書で特徴的な資料を翻刻する。

○中等学校として開設された府学は、のちに「京都府中学」に発展するが、その素地が府学には既に胎動している。⁽¹⁰⁾ただ開設当初は、「欧学舎」を始め「英学校」「仏学校」「数学校」「立成学校」などがその中で分立している状況であった。以下の資料は府学の中で分立した「欧学舎」の名称について明治四年に出された伺である。これは『京一中洛北高校百年史』にも翻刻されている。(同書 一〇〇八頁)

伺留 (自明治三年十一月至明治五年十一月)

学務課

欧学舎

語学舎

右此迄角倉洋学所善名未定ニて何か不躰裁之事ニ付此度山口藩邸引移候就而者右二名之中ニ而者如何尤御考慮次第何とか御取極被下度此段相伺候事

辛未三月

中学

(付箋) 欧学舎卜可唱事

(知事割印)

○府学の年間計画は毎年一月に始まり十二月で終るというものである。このため府学の開業式は一月に行われていた。以下の資料はその式次第であり、当時の開業式の様子を知る貴重な資料である。これも『京一中洛北高校百年史』に翻刻されているが、一部不正確なところがある。(同書 一〇一五頁)

伺留 (自明治三年十一月至明治五年十一月)

学務課

正月十一日開業之式

- 一、朝八字知事参事及ヒ大監察学校掛諸官員諸教官揃之事
- 一、講堂江諸官員諸教官生徒不残出席打鮑頂戴畢而聴聞之もの出席
- 一、御誓文写拝読^{知事 勲之}字体読知^{勲之}
- 一、講釈

国書

出雲路桂蔭

漢書

広瀬典事

退去

(付箋) 伺之通以為永年之定式

(付箋) 古事記旧臘開講書経続講候心得ニ御座候

(付箋) リウトルフ出席候ハ、漢書ノ次ニ講ヘキ哉

○次の資料は府学の開業式にドイツ人のお雇い教師ルドルフ・レーマ

ン (Rudolf Lehmann) の列席の可否を問うた明治四年の伺である。

(同書 一〇〇六一〇〇七頁)

伺留 (自明治三年十一月
至明治五年十一月)

学務課

明後十一日開業御規式等之儀旧臘御創業之振合ヲ以別紙案之通相心得市中小学校へも相達可申哉

一、リウトルフ出席可仕候哉

右相伺申候

辛未正月九日

(付箋) 欧学之儀ハ已ニ稽古相始候付劉徳流布不及出席候事

○府学は中等教育機関であるため、当然進学の問題が出てくる。次の「中学校記」の資料はそれを示すもので、当時から進学を視野に入れて京都は教育をしていることが分かる。

(同書 一一〇八一—一一〇頁)

中学校記 (自明治二年七月
至明治四年八月)

以上欠

一、諸学課都而其階梯を示すまでにて追々進学之者ハ大学校へ進メ

或諸方有名之師家江入学仕らせ可申儀と相心得可申哉

一、諸学課都而和漢に不限広く海外之事に涉り候様先府学ニ於て其方向を示儀と相心得可申哉

一、学則并教師人員俸給等之儀ハ府に於て取調相伺可申哉

一、入校之儀ハ何程御渡可相成哉

右府学之儀ニ付而者追々伺出ヘク候得共先前書之通相伺候間御付紙を以て御指揮可被下候事

庚午八月十三日

京都府

御付紙

学則之儀ハ追而可被仰出先伺之通

入費之儀は一ヶ月金千両之定額御渡可相成ニ付教師給以

下総て定額之内を以て取賄可申事

(朱書)

庚午八月十三日榎村権大参事参朝之節太政官江差出即日御付紙相成候事

○京都は欧学教育を重視するが、それだけに教師の人数、授業時間、生徒の学習能力、教授法などが問題になる。以下の資料はそうした諸問題を視野に入れて明治四年に欧学教育について欧学教官惣代の渡忠純から伺いを立てたものである。(同書 一二三九—一二四一頁)

諸伺願書 (欧学)

学務課

伺之通 (朱書)

謹而愚考仕候ニ、教授ニ定時刻アリ、況や教師ハ各学トモ常ニ志人ニシテ、向後入学ノ生徒ニ定限ナケレハ、徒ラニ教師ヲ勞シテ生徒

ニ得益少カラシカ故ニ、当今見込、如左

一、現今教授ノ時間ヲ六時ナレハ、一時間ノ教授ヲ二十五名トシ、惣計百五十人ヲ直伝ノ正員トス。其ノ餘ハ次章教官請持ノ教授則ヲ以、教授スヘシ。左スレハ随而教官ノ員御増加相成候者、素より自然之道理候得共、生徒中ニ而進学ノ徒ヲ追て精撰シ、之ヲ教授ノ補助トシテ使用仕度候事

一、以来、新入学ノ生徒、其才ノ鋭鈍ニ随ヒ、或ハ一月或ハ二月、教官ニ而教授ノ上、粗綴字声音相曉候、且教師江相譲リ候一則ヲ相創メ候様致シ度、左モ無之候而者、新旧生、混雜甚教授ニ差礙の困却仕候様教師ヨリ申出候。就而者右ノ一則無之候而ハ自然教師ヨリ入学相断リ、壹年間兩三度ナラデハ入学ヲ肯ンセス。甚ダ不便ニ相考候。尤教官預リ中万一鈍才成業ノ見込無之者ハ直ニ□□ノ後、退学セシムベク、但此儀ハ偏党ナク公然ト所置致シ度、左候得ハ以来教師相譲リ候程ノ者ハ急度成業可相成見込ニ御座候。

右見込之次第教師江示談仕候処同意之旨申出候間奉伺候以上

辛未

欧学教官惣代

渡 忠 純 渡印

○府学は明治十二年に「仮中学」となるが、それは、今までの府学で分立していた諸学校を統合して独自の中学校を実現しようとするものである。当時、京都府の教育界の中心にいた中学監事三宅五郎三

郎は、そうした教育改革と教育方針を知事の横村正直に建議する。その結果、府学は、「仮中学」から「京都府中学」へと発展することになる。⁽¹⁾その意味で、三宅の建議は、当時の京都の教育観を知るための極めて貴重な資料である。このため『京一中洛北高校百年史』でも全文が紹介されている。私も、京都学を構築する場合、この資料は見過ごすことはできないと思われるので、ここで翻刻しておきたいと思う。ただ、句読点や改行は、私が独自に行った。(同書 一二二四—一二三四頁)

仮中学内諸学校ノ改正ヲ仰望スル建議

中学ハ、人智ヲ薰陶シ、芸能ヲ進取スル基礎ヲ教育スル、実ニ人生ニ必用ナル学校ニシテ、小学学科ヲ卒業スル者、初メテ此ノ校ニ入り、高尚ノ学科ニ就キ、智識ヲ發達シ、見聞ヲ廣大ニシ、他日大学ニ登リ、専門科ヲ脩メ、朝ニ在リテハ帷幄ノ謀ニ参シ、野ニ在リテハ物産ヲ増殖シ、経済ノ道ヲ講明スル人物ヲ出スモ、中学ノ教育ノ完全ナルト否サルトニ起源セサルハナシ。故ニ、小学ノ教育隆盛ヲ極ムルモ、未タ以テ俊傑ノ士ヲ養成スル能ハズ。大学ノ教科、美ヲ尽スト雖モ、中学ノ教科ニ欠クコトアレハ、未タ以テ完全ノ博士ヲ見ルヲ得サルベシ。世ノ教育ニ従事スルモノ、深ク猛省スヘキコトナラスヤ。

回顧スレハ、大政維新ノ際、府下ニ大学ヲ設ケラレ、教育ノ天下ニ、一日モ欠クベカラザル 宸慮ヲ拡張アリシヨリ、府庁ノ保護ヲ以テ京師ニ順次二十六十有余ノ小学ヲ興起セラレ、前ノ所謂ノ大学

ハ、皇居ノ東遷ニ遭遇シ、校ヲ閉ルト雖モ、府庁ヨリ繼イテ、中学ヲ設置セラレ、漢学国学ノ二科ヲ教授シ、猶、国ノ開明ニ進ムニ随ヒ、外国教師ヲ招聘シ、明治三年ノ冬、欧学舎ヲ開キ、英独ノ二語学科ヲ中学生員ニ兼修セシメ、遂ニ仏語学ヲモ教師ヲ置キ、教場ヲ設ケテ、教授セラレタリ。此ノ時ニ当リ、外国教師ノ給料ハ、総テ文部省ヨリ下付セラル、ヲ以テ、以上三語学校ヲ設立アリシト雖モ、費用ノ乏シキヲ憂慮スルコトアラサリキ。其後、文部省ニ学制ノ改正アリテ、我府ニ奉務スル外国教師ノ給料ヲ、同省ヨリ下付セラル、コトヲ廢セラレタルヲ以テ、已ムヲ得ス英独ノ二学校ヲ存シテ、仏学校ヲ鎖サレタリ。

明治六年ノ夏、中学ヲ今ノ地ニ遷サレ、英独立成数学ノ四学校ヲ設ケ、遂ニ他年、真正ノ中学ヲ設クヘキ位置ヲ定メラレタリ。爾後、数年ノ星霜ヲ経テ、正則中学ヲ設クヘキ今日ノ時勢ニ至レリ。

其間、天皇陛下ノ親臨ヲ辱スルコト、兩度ニシテ、生員ニ物典ノ恩賜アリ。大臣参議ノ来落アリ。外国公使博士等ノ視察アリ。中学ノ榮譽ヲ後世ニ伝ルコト、寡少ナリトセス。雖然、此ノ中学ニ入り、其業ヲ受ル者、単ニ一学科ヲ伝習シテ、中学完全ノ教育ヲ受クル者アラス。英ニ独ニ立成ニ数学ニ、各校各生員アリキ。是則、時勢ノ然ラシムル処ニシテ、深ク怪ムニ足ラサルナリ。

以降、明治十一年ノ春、旧英学教師ノ約ヲ解キ、今ノ教師、アルノルド氏ヲ、東京大学部ヲ経テ招聘セラレ、該校ノ教則ヲ文部省直轄ノ英学校教則ニ比較シ、取捨改正セラレ、殊ニ旧来生員ノ学業、偏跛スルアルヲ以テ、新タニ小学生員ノ中ヨリ小学学科下等卒業生

ヲ拔擢シ、学資ヲ貸付シ、正則中学学科ヲ教授セシム。

此ノ生員タルヤ、年齢ト云ヒ、学業ノ順序ト云ヒ、中学生員ニ適合スルモノナリ。故ニ、今年春期ノ定規試験ニ此ノ生員ニ各校ヨリ附与スル点数ハ、実ニ感賞スヘキモノニシテ、英学校ニ得ル点数モ、数学立成学校ニ得タル点数モ、更ニ偏跛スル処ヲ見ス。今ヤ、此ノ生員ニシテ各校ニハ温良ノ教員アリ。今ニ当リテ改良ヲ要シ、不足ヲ補フヘキ事件ヲ左ニ上伸ス。

一、中学校規則ヲ文部省ヘ進達シ、中学設立ノ准許ヲ受ケ、仮中学ノ称ヲ改メ、正則中学ト倣シ、英学校ヲ英語教場、数学学校ヲ数学教場、立成学校ヲ和漢学教場トシ、各生員ヲシテ之ヲ兼脩セシムルヲ法トシ、小学下等学科ヲ卒業スルモノニアラサレバ、入校ヲ許可セズシテ、学業に偏跛スル生員ノ跡ヲ絶チ、管内人民ヲ告諭シ、殊ニ市中六十四学校ヨリ毎年数十名ノ卒業生ヲ入学セシメ、学業ノ決シテ小学ニ止ラザルコトヲ父兄ニ了解セシメ、管内ノ学風ヲ一層高尚ニ導キ、他日工業製作ノ学校ヲ設置アルモ生員ノ不足ヲ憂ル等ノコト無キコトヲ希望ス。

一、師範学校ニ主任ノ校長アリテ常ニ該校ヲ維持保護スルト雖モ、中学ハ其人ナシト云フモ可ナリ。如何トナレハ、学務吏員数名、中学内ニ詰メ、中学事務ヲ取扱ト雖モ、小学ノ事務多端ナルヲ以テ、其思慮ノ注ク処ハ小学ノ事務十二八九ニ居ル。大検査アリ、小検査アリ、其他教師ノ任免、学校ノ設立、文部省其他ヘ進達事務、本府支庁等ヘノ往復等、実ニ小学ノ事務繁多ナリ。故ニ、中学主任ノ校長ヲ定メ、之レヲシテ小学事務ニ与ラザラ

シメズシテ、外国教師ヲ督励シ、生員ノ行跡ヲ監督シ、校舎器械ヲ保護セシムル等ノコトヲ委托アリタシ。然ラサレハ、家主ナシニ同シク、誰アリテ奴僕ノ怠惰ヲ戒メ、妻子ノ不良ヲ彈サン。

一、独乙学校開設アリシ時勢ハ、今ノ時勢ト異ニシテ、文部省ニ於テモ英独仏三ヶ国ヨリ各教師ヲ招聘セラレ、各教場アリテ、各国ノ学科ヲ生員ニ所好ニ任セ、教授アリタリ。其後、同省ニテ学制ノ改更アリテ、独乙学ハ医学脩業ノモノニ限り、仏学ハ兵学法律学専門ノモノニ限り、其他ノ百工技芸ハ総テ英語ニ限リタリ。故ニ、我国ノ学制一変シ、独乙学ヲ学フ者ハ医師、仏学ハ法律士陸軍士官ノコトナレリ。本府ニテモ殊ニ独乙学校ニ新タニ予科医学校ノ称ヲ附セラレタリ。之ニ因リテ之ヲ觀レハ、独乙学校ハ医学ヲ脩業スル者ニ限ルヲ以テ、決シテ中学ノ学科ニアラス。医学専門ノ予科ナリ。故ニ、今日ヨリ之レヲ療病院ノ管轄ニ歸セシメテ至当ナルヘシ。

一、数学校助教ノ者ニ学力優等ノ者ヲ拔擢シ、中学専任ノ命ヲ附セラレンコトヲ欲ス。然ラサレハ、小学大小検査ノ都度、出張アルヲ以テ、中学生員ニ迷津ノ嘆アルコトヲ免レズ。

以上ノ四項、何卒御採用被下度、此段上申仕候也。

十二年三月

八等属三宅五郎三郎

京都府知事榎村正直殿

④明治四年に欧学舎を始め洋学校の建設地の選定が問題になった。そ

こで二人の外国人教師に調査を依頼し、意見を求めることになる。二人は協力して意見を纏め、京都府に提出している。その資料が以下のもので、京都の異文化学習の意欲が理解される。〔徳重文書〕第三卷 一七八九—一七九一頁)

諸伺願書(欧学)

学務課

今般、新規洋学校御造営之趣を以、去ル三日拙子共江場所見分被仰附、帰路二条城江御同伴被下、総而拝見仕、大慶奉謝候。扱、今般御取建可相成候学校ハ、必定永続之御造営與奉勘考候得ハ、第一其土地を御撰相成候儀者肝要之事件與奉存候。既ニ亜米利加合衆国及其他欧羅包州内之学校ハ、総而其他之質を相撰、純粹な留空氣ある場所を專要與致候得者、別而本國ハ列国よりは疱瘡等之伝染病多分なる故ニ、学生之小兒等者、平常純粹なる空氣□□□□運動法を仕候得者、前条之病を防ぎ、人体を壮建に志て、勉強致候て、各記憶を強る之根元與奉勘考候。就而者過日拝見仕候御城内ハ広地ニシテ、多分之余地有之。彼之地ハ学校等御取立御座候而適當之場所與奉察候。或ハ貴府中ニ未タ適當之場所も數多可有御座哉。今一応御精撰之上御確定被下度、謹而奉一輪候拜矣。

於京都 千八百七十一年九月廿一日

チャーレス・ボールドウキン

リウドルフ・レーマン

呈京都府

右者両教師 横文差出候付大意翻訳仕此段申上候

辛未八月八日

三浦権少属

⑤英学を学び、異文化への関心を示す学生に対して京都府は特別の配慮を示す。それは、⑥の資料とともに、京都府が新しい時代に向けて人材養成に強い関心を示すものである。(同書 一四四四頁)

伺留

学務課

生徒入舎為致候処、当時英教師角倉邸ニ而致教授候ニ付、英学生徒勸業場内ニ罷在候而者往反門出入も煩敷且質問修業致し候為にも教師教官ニ隔り居候而者不勝手ニ候間、教場御出来迄ハ、暫時英学入舎之者、角倉邸ニ而一間相渡、寄宿為致呉候様申出候。尤、賄向者欧学舎一緒ニ為致可申候。此段相伺候也。

辛未四月九日

欧学舎

⑥英学校生に対する奨学生募集。(同書 一四五八頁)

伺留(明治十年)

過般第百三十八号ニテ布達致候中学内英学校ニおゐて貸費生十名限り相募り候。必来ル七月中延期候条、入学志願之者者同月迄、学務課へ可願出候事。

一、英学校教則中普通科課程表第二年第一期第六級課目中習字算術之二科ヲ増加ス。右之通管内江相達もの也

明治十年五月

京都府知事 榎村正直

(2) 外国人教師に関する資料

①京都府は、上乗の資料から分かるように、独自の立場から教育方針を立て、府学を経営するが、特に海外の開明的な新知識を重視することから、多くの欧米人を教師として招聘する⁽¹²⁾。このことが、維新政府の方針と齟齬することになるが、次の資料はドイツ人ルドルフ・レーマンを京都府が教師として採用するさいの明治三年の伺である。ここにははっきりと世界に目を開く京都の態度が示されている。(『徳重文書第十六卷』C五四三二―五四三三頁)

各国御交際貿易之道相開ケ広ク世界ノ知識ヲ被為求候ニ就テハ西洋諸種之学追々伝播可相成其内第一言語算数等海外諸国ニ通スル事即今之急務ニ付今般字魯西人リユウドルフ・レーマン京都府へ雇入レ仏英蘭独等之語学并数学会教授候条当管轄華族以下致伝習度望之者ハ当官へ可願出事

但諸藩士族等モ当地詰合之向伝習望之者ハ其藩邸より同府へ願出候得ハ詮議之上可差許事

庚午十一月

留守官

○京都府は優れた外国人を教師として招聘しようとする努力を常にしており、わざわざ東京にまで出かけて良き教師を探索している。次の資料は、明治十一年の調査報告書である。ここには優れた外国人教師を模索する京都の苦悩がよく現れている。(同書 C五五二八―五五三一頁)

在東国司純行伺書ニ申越有之。良教師ハ一ヶ月式三百円以上ノ給料ニ無之テハ条約維相整云々、現今、教師アルノルドノ如キ人物ハ高給ニ無之テハ到底雇入六ヶ敷云々、此上、如何程尽力仕候テモ注文通り安直ノ良教師ハ中々急ニ手ニ入り不申云々ト有之候処、現今当校生徒ノ学力ト校勢トヲ以テ考フルニ、一ヶ月式三百円以上ノ教師ハ、現今ノ生徒ニハ少シ過分ニシテ、夫レ程ノ高給ヲ出シ、雇入ル、ニモ不及儀カト愚考仕候。

目下当校ノ要スル所ハ、先ツ普通科丈ケノ教授充分ニ相出来、生質温和ニシテ品行正シク、授業懇切ノモノニ有之候得者、宜キ儀ト愚考仕候。就而ハ前書高給ノ教師ハ当今ニ於テハ先ツ不用カト奉存候。純行伺書ニ又云フ、良教師有之迄一時ノ間ニ合セトシテ、通常教師ノ内、品行正シキ者ヲ選ヒ、雇入帰リ候テハ云々ト。一時ノ間ニ合セニテ果シテ他日ニ良教師見当リ候ハバ格別、若見当リ不申節ハ此間ニ合セノ教師ヲ放逐セシ歟。後チノ教師ナキヲ如何セン。一時ノ間ニ合セガ将来ノ間ニ合セニ相成、大ニ生徒ノ進歩ニモ関涉仕候ノミナラス、又夫レ程ニモナキ教師ヲ遙ニ東京ヨリ無益ノ旅費ヲ費シ、伴レ帰ルニモ不及儀ト愚考仕候。

就而ハ前文明細書ニモ申上置候英人レー子ル儀、普通科教師ニハ相当ト存候。御雇入ニ相□候ハ、現今教師アルノルドヘハ重ニ数学・理化学等ヲ教授為致、レー子ルヘハ専ラ文学・歴史・地理学等ヲ受業為致候ハ、各其長タル所ヲ採リ、彼我ノ都合モ大ニ宜ク、生徒ノ進歩モ一層速ニ可相成ト奉存候。就而者同人儀、神戸在留ノ親戚許ヘ月々数回往返致候趣キニ付、前以テ次回ノ神戸入港ノ日ヲ

問合セ置、其前夕昇職下神仕、入港次第面謁ノ上、直チニ熟議ニ及ビ、条約其他万端談判仕、相整候上ニテ速ニ同道入京為仕候様取運候テハ如何ニ御座候哉。此段相伺候也。

十一年一月廿八日 八等属 市川 雄 押印
追テ伺済ノ上ハ国司純行帰京ノ上、可取運積リニ御座候也。

○維新政府は、京都府の外国人教師招聘について政府方針と齟齬しているのではないかという疑念から通達を出し、京都独自の外国人招聘を牽制しようとする。次の明治六年の資料はそのことを示す（同書 C 五五〇五―五五〇七頁）

府県下ニ於テ私費ヲ以テ傭入候外国教師条約文面区々ニテ不都合之廉不少候ニ付今般冊条約書文例刻成候間後來右ニ照準シ条約取結可申此段相達候也

明治六年三月十五日

文部省

右之通り達有之候条篤心得管内江無漏相達るもの也

明治六年三月

京都府知事 長谷信篤

私費ヲ以テ外国教師雇入継続致シ候者当省ノ許可ヲ待タズ直ニ条約取結候向モ有之哉ニ相聞候右様不都合之儀不相成候条此段更ニ相達候也

明治六年五月三十一日

文部省三等出仕

従五位 田中不二磨

右之通達シ有之候条篤心得管内江無漏相違る者也

明治六年六月

京都府知事 長谷信篤

○また京都府が招聘した外国人教師は優れた能力をもったものも多く、京都での採用期間が終ると、東京の大学の教師として採用されるものもいた。フランス人のレオン・ジュリーもその一人で、明治八年一月の仏学校の契約満期後、東京開成学校の文学と歴史の教師として同年四月に採用となる。次の資料は、それを示すものであり、ジュリーの教育観が理解される。（同書 C五六一—五六一六頁）

御傭当府出張仏語学教師満期ニ付更ニ開成学校へ御傭入之儀
ニ付願

仏郎人レランデユリー去ル明治五年一月ヨリ雇入来ル明治八年条約満期之処、同人義ハ雇人以来日夜勉勵教授シ、生徒ノ寢食動靜ニ至ル迄厳密ニ注視シ、休日ニテモ諸生徒同行散歩之外ハ、故ナケレハ、妄ニ他出セス、只生徒ヲ教訓スル而已。生徒モ亦之ヲ習慣シ、日々勉勵進歩致シ、実ニ任ヲ尽ス教師ニテ生徒之中已ニ独学ヲモ了解ス可キ之域ニ進ントスル者モ有之。緊要之時ニテ今半途ニシテ閉止致シ候テハ実ニ可惜儀ニ付、今後一ケ年間御継続之儀、先般上申候処、御規律有之難聞届旨御指令之趣拝承。然ルニ右ジュリー之儀者前陳之通長ク我邦ニ滞在、人情風習モ熟知シ、生徒ノ為ニ懇切勉勵再度難得良師、実ニ可惜。生徒モ是迄苦学進歩如斯良師ヲ失フハ

可愍次第二付、何卒格別之御評議ヲ以テ更ニ開成学校ニ御傭入被下、是迄随学ノ生徒進歩之者ヲ入校被差許度、此段致懇願候。宜御指揮被下度候也。

明治八年一月廿五日

京都府知事 長谷信篤

文部大輔 田中不二磨殿

（朱書）

書面仏人ジュリー儀ハ東京開成学校ニ於テ更ニ可雇入見込ニ候得共從学生徒同校へ入学之儀ハ予メ許可難致候事

明治八年二月十日

文部大輔

田中不二磨

之印

御府御雇教師仏人レオンジュリー氏、御府ニ於テ過般御雇止相成候旨ニ付、来ル四月四日ヨリ向二ケ年間当校へ文学及歴史科教授トシテ雇入之儀伺置候処、一昨九日伺済相成候間、此段為御心得御報知申候。尤本人江モ右之次第申遣シ候得共、尚御府ヨリモ九日限迄ニ当表へ罷出候様、同人へ御通知相成度、此段御依頼旁申進候也。

東京開成学校長心得

濱尾 新

同 学校長

畠山 義成

京都府知事 長谷 信篤 殿

○維新政府の外国人教師招聘の統制策は私学にも及び、明治六年には

「私学雇入外国教師条約文例」を作成し、私学に於ける外国人教師の雇用についても政府の認可が必要となる。次の二つの資料はその具体例である。前者は明治十三年に東本願寺設立の教校の詩文教師に採用した中国人陳曼寿の政府提出書類であり、後者は明治二十二年に同志社の英語教師に採用したアメリカ人ドワイト・ダブリウ・ラルネットのそれである。(同書 C五八二九頁、C五八六五―五八六六頁)

清国人雇入之儀ニ付上申

当府下々京区三十組常葉町東派本願寺役僧細川千巖ヨリ今般清国人陳曼寿雇入之儀届出免状相受度旨別紙之通願出候間可然御詮議相成度書面相□此段上申候也

明治十三年六月十日 京都府知事榎村正直代理

京都府大書記官 国重 正文

外務卿 井上 馨 殿

外国教師雇入期限満期ニ付継続願

京都府上京区第十一組常盤井殿町六百廿二番戸居留

北米合衆国人

ドワイト・ダブリウ・ラル子ツト

右之者去ル明治十七年三月十五日ヨリ本年三月十四日迄弊社英学教師トシテ雇入置候処右期限ト相成候間今般更ニ本年三月十五日ヨリ来ル明治二十七年三月十四日満五ヶ年間雇入継続致度候間更ニ免状

御下附被成下度此段奉願候也

明治二十二年二月二十五日

京都府上京区第拾組相国寺門前町

同志社長新島襄代理

外務大臣伯爵 大隈 重信 殿

金森 通倫 押印

②外国人教師による教育は、それまでの教育方法とは全く違い、新たな教材を必要としたことは言うまでもない。そのさい、日本人の一般的なイメージでは理解できないものも多々あった。以下の資料は、筆記用具などの教材の購入にさいしての伺であるが、京都府が外国人教師の要求によく応えようとしていることが分かる明治四年の資料である。(同書 C五四三四―五四三七頁)

伺留 (明治三年十一月)

学務課

別紙界吊仏教場ニ於テ習字書取等ニ相用度教師自費ニテ為拵生徒ニ相授候旨申出候右学校之字面ハ相削西京仏教官與為相改候テハ如何哉此段相伺候事

十二月廿二日

欧学舎

榎村君手ニテ

(朱書) 教師自費もいか、敷候

又仏教官三字ハ尤可笑

仏教場ニ於テ伝習之時限折木可相用之處半鐘ニテ報刻致シ旨教師より申出候此段相伺候事

辛未十二月廿三日

欧学舎

(朱書) 不苦候 横村印

伺留

学務課

一、フルスケツフ

百帖

西洋紙之名、但壹帖拾式枚有之由、系ノ有紙ニ而手本認候ニ用。

一、ベル

西洋鈴、教場ニ而生徒ヲ進退致シ候ニ用之、若相調ひ不申ハ振

鈴ニも不苦由。

一、キユロツヘン

壹筥

西洋筆

壹筥

右者ボヲルトウキンヨ里教場ニ而相用候品御買上置紙筆ハ生徒ト代ニ而御下渡被下度銘々区々之品持参候而者不宜。

一櫛之品相用申度旨申出候ニ付御買上被下度相伺候也。

辛未四月七日

欧学舎

③当時の学校には今日見られるような暖房器具はなかった。次の資料は、外国人教師がそれを要求し、その購入を伺う明治四年の資料である。(同書 C五四四八―五四四九頁)

諸伺願書(欧学)

学務課

此程劉奴留婦江御注文相成候カーヘル六本之中式本丈者礼満心配大阪ニ有合セ近日到着可仕候得とも、其余彼地ニ無之故、四本不足之分、シヤンハイエ最早申遣シ置候ニ付、来月十日比二者来着仕候由、就而者当教場老本御渡可相成。今老本者教師住所江御渡相成可申哉。此義懇願□□候様申出候。尚又角倉英学所ニ式本有合セ、老本ハ烟筒短ニ付、老間丈長免教場中央へ居置候様仕度、教師申分ニ御座候。今老本者自分之部屋ニ相用度ニ付、御渡被下候様□出候。右之通両教師 申出候条、官自費之間御指揮被下度、此段相伺候事。

辛未九月廿五日

欧学舎

④京都府に雇用された外国人教師は、京都だけではなく、日本の学術と文化の発展に貢献するが、その一つの例が和独辞書の完成である。これは、ルドルフ・レーマンの尽力によるもので、彼が日本で始めて完成させることになるが、京都府は、明治四年に欧学舎の坪井信立をドイツ字書掛にし、レーマンと協力して辞書の作成をすることを命じている。次の資料は、それを示すものであり、辞書は、足掛け二年をかけて完成し、明治六年に村上勘兵衛の経営する書林から出版された。(同書 C五四六四頁、C五四七一頁、C五四七三頁)

○諸伺願書(欧学)

(明治四・五年)

学務課

和訳独乙字書翻訳休業中精々勉力罷在候得共何分人少ニ而速ニ成功無覚奉存候。右ニ付、明石少属並ニ種痘医員中、江馬検介、小石仲藏、榎林建吉江右字書翻訳被仰付、各分課出精速ニ成功仕候様仕度奉存候。以上。

六月

渡中得業生
坪井少属

○倭訳独逸辞書

右者当府中学語学教師李魯西人之校ニて今般上木之上、生徒并其外之者へも売下ケ渡候積則別紙稿書差出候間、開板之儀御差許被下度、此段及御掛合候也。

辛未五月十二日

大史御中

京都府

○奉願上口上書

一、和訳独逸辞書三編総丁数百五十丁と見積り、此彫刻料代金百五拾貳両貳分、右之内、板下追々御下ケ之分、夫々彫刻出来奉上納候ニ付而者、恐多御願ニ御座候へとも、下職之者、夫々改進し仕度奉存候間、右メ高之内、金百両前借被仰付度、右願之趣御聞届被成下候ハ、如何斗難有仕合可奉存候以上

壬申六月廿七日

御用書林
村上勘兵衛

⑤天体儀も当時の教材としては珍しいものである。チャールス・H・ボールドウィン (C.H. Baldwin) は、明治六年五月に京都府と雇用関係を結び英学校の教師となるが、先に示した文部省からの牽制によって同年十二月に文部省への契約書類の写しを提出して正式に認可されることになる。次の資料は、彼が教材として明治五年に天体儀の購入を進言したものである。(同書 C五四九二頁)

諸伺願書 (欧学)

(明治四・五年)

学務課

一、グローブ

一個

但球形星学器

価拾五円

右者教場必用之品ニ付、過日ホウルドイン神戸ヨリ用帰仕候処、御買上相成度旨申出候。此段奉窺候事。

壬申九月二日

欧学舎

ボールドウインは、彼の学識が請われて明治十九年の「学校令」で京都府中学が京都府尋常中学校になった以後も教師として採用されている。明治二十三年の「学務分掌」記録に「尋常中学校一件 (明治二十三年中)」として彼の再雇用を求める学校長徳永満之 (後の清沢満之) の上申書がある。次の資料がそれである。(同書 C五八五一頁)

外国人雇継之儀ニ付上申

一、本校雇外国人チャールス・ヘンリー・ボールドウイン儀本年三

月三十一日解雇期限ニ有之候処来廿三年度ニ於テモ本年同様之
条約ヲ以テ引継御雇入相成候様致度此段上申仕候也

明治廿三年三月六日

京都府尋常中学校長

徳永 満之 押印

京都府知事 北垣 国道 殿

⑥京都府は農業振興のため明治十年に近代科学の最新の気象学や天体
学に注目し、外国人教師を招聘する。科学的知識に一般人を近づけ
ようとするもので、次の資料は京都の開明性を示すものである。
(同書 C五六四九—五六五〇頁)

今般当府舎密局ニおゐて外国教師ホールレン氏雇入相成候ニ就而者
大気顕象学者特ニ農学必用之処只天象学ヲ併セテ教授為致候ニ付修
業いたし度志願之者ハ同局江可願出此段相達候也

明治十年三月十三日

学務課

市郡学校

学区取締中

当局へホールレン氏備定ニ付而者大気顕象学ハ特ニ農家必用之課且
天象学ヲ以併セテ可令教授ニ付有志輩ハ就業可致候条郡村掛ヲ以各
郡村区长并学務課ヨリ各小学校へ論達可致哉此段相伺候

十年三月七日

舎 密 局 池田満

勸業課 押印

V 教育文化資料と「京都学」の可能性

私は、今、明治三年から明治二十三年の間に見られる中等教育に関
するごく僅かの教育文化資料、特に当時来日した外国人教師と異文化
理解に焦点を当ててそれを翻刻紹介した。そこで分かることは、我が
国が明治維新によって政治的に極めて不安定な状況の中にあつたにも
拘らず、維新草創期から京都復興のために高度な近代的知識の学習
が、外国人教師の招聘によって行われていることである。こうしたこ
とが可能になるのは、言うまでもなく京都人の文化性とその背景にあ
るからである。

教育の基本は、教育者と学習者と教育内容の三つによって構成され
るが、そのさい教育者が教育する教育内容を学習者が理解することが
教育が成立する前提となつている。従つて、学習者が教育内容を理解
してくれない場合は教育は成立しないことになる。このため教育成立
の条件には学習者が理解できるだけの知的レベルが求められ、それに
達していることが必要である。それは、学習者のうちに教育内容に対
する意欲や関心が起る基礎であるが、そのことは、単に個人のレベ
ルだけでなく、個人を取り巻く社会そのものにも求められるのであ
る。なぜなら、社会そのものが必要としなかったり、理解できなかつ
たりする教育内容は、いくら教育者が説明しても吸収されないからで
ある。例えば、極端な例を挙げると、西欧中世のキリスト教社会が考
えられるが、そこでは、周知のようにキリスト教的観念以外は排除さ

れており、それ故、西欧の中世社会にそれ以外の教育内容を持ち込むことは、いくら人間的な知識であつても悪魔の仕業として危険視されたのである。⁽¹⁾ こうしたことから分かるように、教育が成立するためには、教育内容を吸収できるだけの社会の知的レベル（それを文化性と呼ぶことができる）がなければならぬのであつて、こうしたことが教育の背景として個人の学習を促すのである。

従つて、このように教育成立の基本条件を考えると、京都が外国人教師を受け入れ、近代的知識を教育できたのは、当時の京都の文化性がそれを教育できるだけの知的レベルにあつたからであると言ふことができるであろう。そのことは、先に翻刻した教育文化資料からも分かる。例えば、ルドルフ・レーマンを招聘するさいに、京都府は「各国御交際貿易之道相聞ケ広ク世界ノ知識ヲ被為求候ニ就テハ西洋諸種之学追々伝播可相成其内第一言語算数等海外諸国ニ通スル事即今之急務ニ付」という認識を持っていたが、それは、そうしたことが認識できるだけの文化性を京都はもっていたということを逆に証明するものである。これは、日本社会全体としては政情不安定な明治三年のことであり、日本社会がまだこうしたレベルには達していないときである。その意味で、京都は日本社会の中でも特異な文化的位置を持っていたのである。

私は、こうした京都の文化性は、先に見た空海の庶民教育に現れているように、常に庶民を知的なレベルに引き上げようとする努力が宗教者を始め様々な知識人によって行われた結果、培われたのではないかと思う。特に、宗教の力は、京都が日本の首都であつたことから無

視できないであろう。なぜなら、京都人が教養の側面に於て強い教育的感化を受けてきたのは宗教からであつたからである。それは、現在の都市化された日本社会では基本的に形骸化している檀家制度が、京都ではまだ今でも息づいていることから分かるように、京都の歴史に於て宗教と庶民との間には極めて密接な関係があつたからである。今日、京都が宗教都市と言われるのもこうした事態があつたからであり、単に各宗の本山があり、宗教的文化遺産があるからではない。今回、私は、『徳重文書』に散見される外国人教師と京都独自の教育方針を示す中等教育に関する教育文化資料を翻刻したが、京都の本質を明らかにするためには、京都の宗教教育の資料の発掘が大事ではないかと考えている。⁽²⁾ それは、今、説明したように、宗教と庶民との関係は無視できないからである。しかし、いづれにしても、京都にはこうした特殊な文化性があるが故に、私は、京都の本質を研究する「京都学」の構築が可能ではないかと思うのである。

注

- (1) 「綜藝種智院式并序」〔弘法大師全集〕所収 一八七頁。
- (2) 同書 一八九頁。
- (3) 財団法人大学コンソーシアム京都設立10周年記念誌編集委員会『財団法人 大学コンソーシアム京都一〇周年記念誌』二〇〇四年、一八一頁。
- (4) 同書 八九頁。
- (5) 財団法人大学コンソーシアム京都『季刊学術コンソーシアム通信 創刊号』(Academic Consortium Newsletter Vol.1) 二〇〇二年夏、二頁。
- (6) Eduard Spranger: Kulturfragen der Gegenwart, 1953, Quelle & Meyer, Heidelberg. 村田実・長井和雄訳『現代の文化問題』牧書店、昭和三十

- 四年、一〇二頁。
- (7) 衣笠安喜編『京都府の教育史』思文閣出版、昭和五十八年、二二二頁。
- (8) 拙稿「明治初期に於ける近代京都の教育と国際交流管見」(京都産業大学日本文化研究所報『あふひ 第五号』平成十一年九月、所収) 参照。
- (9) 拙著『島地黙雷の教育思想研究―明治維新と異文化理解―』法蔵館、二〇〇四年、三四―三六頁参照。
- (10) 拙稿「今立吐酔の宗教観と教育実践」(『京都産業大学論集』人文科学系列第29号、平成14年3月) 参照。今立吐酔は、京都府中学初代校長で、明治十二年十月から明治二十年七月まで在職。
- (11) 拙稿「今立吐酔の教育思想」(『京都産業大学日本文化研究所紀要』第六号、平成十三年三月) 参照。
- (12) 拙稿「明治初期に於ける近代京都の教育と国際交流管見」参照。
- (13) 拙稿「近代的思惟の奈落と教育哲学の課題」(『関西教育学会紀要』第15号、一九九一年、所収) 参照。
- (14) 直接京都の宗教教育を扱ったものではないが、京都に於ける明治維新期の仏教の動向については拙稿「明治維新时期に於ける廃仏毀釈と京都諸宗同徳会盟」(『京都産業大学日本文化研究所紀要』第九号、平成十六年三月) 参照。

Study about the Educational Cultural Materials in order to Construct “Kyoto’s Studies”

Kakushou KAWAMURA

Abstract

The academic tendency in the recent Japan becomes extremely detailed and exact as it is influenced very much by the method of scientific study. But on the other hand it seems that there is not the strict viewpoint which integrates the whole of subdivided studies. In this essay I think the fundamental problem, “What is Kyoto’s Studies?”, from the latter viewpoint. Because “Kyoto’s Studies” study seemingly a region of Kyoto, but we must think it as “regional-whole Studies” as Kyoto is connected with the whole of Japan because Kyoto was the capital more than thousand years and has developed as the center of Japanese history and culture.

In this essay I made it clear that there was the education in Kyoto as the background which could organize “Kyoto’s Studies” as “regional-whole Studies”. Kyoto has cultivated the tradition in the long history and made the profound deep culture permeate into the popular life. That becomes the foundation which forms the consciousness of cultural inheritance between the people living in Kyoto. In this sense the culturality and educationality have its roots deeply in the region in Kyoto. Also we must not disregard “phenomenon of education” in order to construct “Kyoto’s Studies”.

From such a interest I regard the special sense of education in Kyoto and think of the possibility to construct “Kyoto’s Studies” by reprinting the educational cultural materials in early years of Meiji. Then as the reprinting materials I depended on “Tokushige-archives” which Dr. Asakichi Tokushige, scholar of Japanese history, collected. Because I knew that there were no original materials in the early years of Meiji except “Tokushige-archives”.

Keywords: method of scientific study, strict viewpoint, study of region, the popular life, education in Kyoto, the consciousness of cultural inheritance, the culturality and educationality in home and region, the educational cultural materials in the early years of Meiji, Tokushige-archives,